表 3－4　陸軍（武装親衛隊を含む）の死者，行方不明，および捕虜
（1939.9－1942.4）

（単位：人）

	死者	行方不明・捕虜	計
1939. 9	16,436	375	16,811
10	1,534	8	1,542
11	1,016	6	1,022
12	817	1	818
1940. 1	826	6	832
2	767	75	842
3	1,087	6	1,093
4	2,194	356	2,550
5	21,602	850	22,452
6	26,553	318	26,871
7	2,204	26	2,230
8	1,642	12	1,654
9	1,636	37	1,673
10	1,348	42	1,390
11	1,216	22	1,238
12	1,201	14	1,215
1941. 1	1,325	28	1,353
2	1,347	17	1,364
3	1,578	92	1,670
4	3,580	570	4,150
5	2,917	579	3,496
6	21,937	1,051	22,988
7	50,154	3,073	53,227
8	52,103	3,242	55,345
9	45,604	2,514	48,118
10	42,510	1,964	44,474
11	28,505	4,695	33,200
12	39,103	10,453	49,556
1942. 1	40,606	10,463	51,069
2	40,560	4,602	45,162
3	40,869	4,254	45,123
4	25,620	1,401	27,021

出所：B. R. Kroener, Die personellen Ressourcen des Dritten Reiches im Spannungsfeld zwischen Wehrmacht, Bürokratie und Kriegswirtschaft 1939－1942, in: Kroener u. a., *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg*, Bd. 5/1, S. 906.

これに対して、ナチスが占領し、しかも戦時下でナチスが苦境に立つ段階に完全な支配下におかれていたところ、すなわち、ポーランド、プロテクトラート・ベーメン－メーレン、ラトヴィア、リトアニア、ギリシャ、オランダ[101]、ユーゴスラヴィア、スロヴァキア、ハンガリーなどでは、七割近くから九割近くのユダヤ人がホロコーストの対象となった[102]。

彼らは、海外その他、ドイツの支配圏外へ移住する可能性と余裕のないままに、いわば事実上の完全包囲網のなかで把捉され、そこに閉じこめられて、ドイツの軍事情勢の悪化・ドイツ支配の動揺の高まりと並行して、とりわけ一九四二年から四三年における総力戦のための物的・人的資源の逼迫[103]と徹底的動員とのなかで、第一番の切捨ての対象となったのである。この現実的背景にはいっさいの「神秘」はない。

一九四一年末から四二年初めにかけての冬は、ドイツにとってその戦争政策の全分野における抜本的変更を迫られるときとなった。独ソ戦がそれまでの電撃戦段階とは異なってドイツの被害をいかに飛躍的に増大させたかは、

つぎの戦死者・戦病死者、行方不明者、捕虜に関する統計（表3－4）が示している[104]。いうまでもなく、一九三九年九月はポーランド侵攻のときであり、ポーランド軍の反撃を反映してドイツ軍の人的損害は大きい。つぎのピークは西部侵攻の一九四〇年五月と六月で、ドイツ側の被害は英仏の反撃の程度を示す。一九四一年六月からはじまるソ連攻撃においては、毎月、これらのピークの倍あるいは倍以上の犠牲をドイツ軍は出していたのである。そして、同年一二月、行方不明と捕虜の数が飛躍的に増大したことは、ソ連軍の反撃が冬将軍の助けも得てモスクワ近郊ではじまったことを示すものである。

戦死者、行方不明の増大は国民に不安を駆き立てる。この間隙をねらって、連合国側は、「この戦争はナチスに対する戦争だ。しかし、この戦争はナチスによって担われているのではない」といった形で、犠牲者、ひいては出征兵士のなかでナチ党員が少ないことを宣伝した。これに対して、ゲッベルスと宣伝省は、戦死者のなかで党員の比率が高いことを強調した[105]。危機はその批判・不満をかわすための手段を求めさせ、いくつもの水路をたどって支配下のユダヤ人の殺戮に向かわせる。問題の転轍の連関構造にこそ、分析のメスは入れられなければならない。